慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	成熟社会における自己モデルの変容 : 統合・安定モデルから多元・非固定モデルへ
Sub Title	Changing models of "self" in the matured society : from the consistency models to the contingency models
Author	岩井, 阿礼(Iwai, Arei)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1993
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.37 (1993.) ,p.17- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000037-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

成熟社会における自己モデルの変容

——統合・安定モデルから多元・非固定モデルへ——

Changing Models of "Self" in the Matured Society

—From the Consistency Models to the Contingency Models—

岩　井　阿　礼*

Arei Iwai

This paper focuses upon changing models of "self", by reviewing the theories of "prolonged adolescence", not only from the psychological point of view but from the social structural viewpoint.

In the industrial society, "consistency of self" was expected as a symptom of normally matured persons, while "plurality and transiency of self" was considered to be a pathological feature of "immaturity". In the post-industrial society, which is safely called to be a matured society, the value system of the society is getting more pluralistic and transient. In the society of this kind, the self which has "plurality and transiency" has been widely found among younger generation, and it was found that these characteristics could be a facilitator to positively adjust to the changing and fragmented social environment of today.

This paper concludes that this "contingency of self" can not be necessarily pathological but the important element of a newly emerging model of self in a more matured society to come.

はじめに

文化人類学や社会学といった社会構造的視野をもつ学問的伝統において，精神の病は社会のもつ中心的，規範的パターンからの逸脱と考えられてきた。またさらに進んで病を社会の自己表現ととらえ，精神疾患を「逸脱」として排除する認識システムの成立過程自体を，狂気をめぐる言説の分析を通じて明らかにする，フーコー(Foucault, M.) の業績もある。[1]

そのように精神疾患の定義が社会・文化的構造に由来し，疾患をめぐる言説が，その時代を語るものであるとするならば，従来「病理」的特徴として排除されていたものの一つが，逆に「病理」の枠から離れ，自己の在り方として認識されるようになってきているという現象は，どのように解されるべきであろうか。

従来，精神の病理的傾向を示す特徴の一部として定義されていたものが，現代人に一般化しているという指摘は，すでにいくつか存在する。神経症的パーソナリティ(neurotic personality) や，[2] アズ・イフ・パーソナリティ (as if personality),[3] 青年期の過度の延長に関する分析をその例としてあげることができるだろう。これらはいずれも本稿の主題である自己の多元化・流動化の問題を含んでいるが，本稿では，そのうち青年期延長論をとりあげる。

本稿は，青年期延長という病理的現象の重要な要素とされてきたある特徴，すなわち自己の多元性・非固定性が，現代人の自己にとって一般的な特徴として評価されるにいたる過程を示し，そしてその変遷を社会構造的視野のもとに分析する。それによって本稿の意図するところは，青年期延長という「病理」の定義（そしてそれと表裏をなす「正常な成人」の自己モデル），社会的価値システム，認識システムの，関係を示すことである。

そのための手順と論述のあらましを，以下に先取的に要約しておくと，それは次のようなものになる。

1. 本稿ではまず初めに，自己の多元性，非固定性

* 社会学研究科社会学専攻研究生（自我・自己論）

(または統合性，安定性の欠如) という特徴について，青年期延長論を整理し，その変遷を紹介した。それによって明らかになったことは以下の 3 点である。

① 1960 年代前後に，青年期延長論の中心点が心理学的要因から社会学的要因へと移行した。

② それに伴って青年期延長論の対象が少数の「病理的」個体から青年一般，さらには現代人全体へと拡散していった。

③ それらの動きに伴って「病理」と「正常」を分節する境界線が移行し，初期には「病理」の中に発見されていた自己の多元性・非固定性が必ずしも「病理」の領域におさまるとは限らないとされるようになった。そして自己の多元性，非固定性は，現代人の特性として認識されるようになり，青年期延長論をはなれて現代的自己論の領域に移されるのである。

2. 多元性・非固定性が，健康な自己のあり方の一つとして評価されるようになっていく過程は，社会構造的要因の重要性が認識されるようになっていく過程でもあった。社会構造的要因として何を指摘するかは諸説さまざまであったが，それらのうちほとんどは，産業社会の成熟とその先に出現する「新しい社会」への移行という大きな流れの中に位置付けることができる。

そこで本稿では，社会の構造変動に関する言説に分析を加え，成熟社会の名で呼ばれる現代社会が，社会的価値の多元化・流動化を引き起こす構造をもつものとして理解されていることを示した。

3. 成熟社会の出現と，「病理」として排除されてきたものの「正常」領域への移行は，認識システムの変化とも連動している。それを示すために，本稿では近代的認識システムと脱近代的認識システムを比較し，新しい自己モデルと脱近代的認識システムとの関係を論じた。

新しい自己モデルは，状況に応じて異なった価値システムを活性化させ (多元性)，環境と相互作用しながら自らを変化させてゆく (非固定性) というものであるが，それは「現実」を多元性，関係性のもとにとらえていこうとする新しい認識システムの実践の一つと考えることができるのである。

I. 青年期延長論の変遷

1. 心理学的説明

現在に連なる青年期延長論は，後述のように，産業社会の成熟と前後して出現した。だが青年期延長現象の最初の心理学的分析は，それよりはるか以前，第1次世界大戦後のドイツにみることができる。

19 世紀末にベルリンの高校で発足し，ワンダーフォーゲルと名付けられた青年運動は，20 世紀初頭に大きな盛り上がりを見せ，自由ドイツ青年運動へと発展する。

そこには青年期として適切とされる期間をすぎても青年運動への関与を続ける若者達がいた。彼らの間に見られる自己の統合性・安定性の欠如や，彼らが定職をもたないことは非難の的となっており，青年運動に「一種の精神的革命」の意味を与えていたシュプランガー (Spranger, E.) ですら，この青年達が「永遠のワンダーフォーゲル」として終わってしまう可能性を危惧している。[4]

このような青年達を，「遷延された青年期 (gestreckte Pubertät)」という名のもとに，青年期心理学に位置付けたのがベルンフェルト (Bernfeld, S)[5] である。当時の精神分析学においては，青年期を幼児性欲が最終的状態を迎える変化が始まる時期として捉えており，よってベルンフェルトは心理一性的な立場からこの青年達を観察した。

彼は青年達の生産活動の中心が抽象的な概念のレベルに留まりがちであることにふれ，その原因を幼児期の性的願望に対する欲求不満や両親との近親相姦的固着，超自我の早期確立に求めている。

しかしもし，ベルンフェルトが社会構造的視点をもっていたならば，その分析は異なったものになっていたかもしれない。自由ドイツ青年運動の背景には，世界分割の完了に伴う対外的な行きづまり感と，資本主義の発達にともなう社会矛盾があった。そして第1次世界大戦の敗戦により，それらはさらに深刻化し，君主制の崩壊と経済の悪化は，特に下層中産階級の奉じていた心理的な権威の安定性を失わせた。[6]「父なき社会」という言葉が初めて使われたのがこのころであることも[7] 考え合わせるならば，当時の青年運動は，社会的価値システム流動化の中でのアイデンティティ探求の試みであったと解することもできるのだ。

しかし，このような社会構造的視点をもった分析はエリクソン (Erikson, E. H.) を待たなければならない。いずれにせよ，ドイツ青年のアイデンティティ探求は，「自由からの逃走」をもって打ち切られた。流動化した社会の中でゆくべき方向性を見失い，強烈な個性に飲み込まれるという方向が選択されたのである。だが，成熟社会の青年達のアイデンティティ探求は，それとは異なった道をたどった。多元化・流動化した社会に能動的に対応し，統合・安定を要件とした自己モデルを修正する方向に向かったのである。

成熟社会と呼ばれる今日的な社会構造を背景にした「大人になれない青年」の前兆に，初めて言及したのがサリヴァン (Sullivan, H.S.) である。サリヴァンは「暦の上だけ大人になっている人たち」[8] を発達症候群 (developmental syndrome) と呼び，10 の症状を上げたが，そのうちの 2 つは統合的・安定的な自己の獲得の失敗と解することができる。その 2 つとは，「自分以外の人とかかわりあいが持てない人 (the non-integrative)」と「永びいた青春期 (chronically adolescent)」で，前者は持続的な対人関係がもてないという症状，後者は愛情の対象を特定できないという症状である。

サリヴァンはネオフロイト派に属し，文化的要因に注意を払ってはいる。しかし発達症候群において分析対象となっているのは，対人関係が中心である。彼は発達症候群を発達過程の歪みによって引き起こされた現象だと考えていた。

サリヴァンが社会構造的要因を視野に入れていない一つの理由には，発達症候群がフォン・フランツ (Von Franz, M. L.) が述べるところの「時代の問題」[9] になっておらず，いまだ「自然の問題」としての性格をとどめていたということがあろう。彼がアメリカにおいてこれらの概念を発表したのは，1939 年の秋のことであった。1940 年前後のアメリカは，国民の大部分が中産階級の意識をもちはじめ，高等教育がマス化するという[10]時期ではあったが，それは成熟社会のごく走りといえるころであった。

しかし，いずれにせよそれから約 10～20 年後，アメリカ，ヨーロッパにおいて，そして少し遅れて日本でも，急増した「大人になれない青年」たちは，社会現象となった。仕事や異性との関係においての決定的な選択を回避し続けるこれらの青年に，アメリカでは自我心理学派のブロスが，スイスではユング派のフォン・フランツがそれぞれ言及している。

ブロス (Blos, P) は，青年期の自我状態のリビドー化によって引き起こされた青年期過程への執着を「遷延された青年期」(prolonged adorescence) と呼んだ。[11] その特徴には，あらゆる生活場面において選択を回避し，不安定性に固執すること，性アイデンティティが未形成で両性的であることが含まれている。ブロスはその原因として，社会条件が心的体制化に及ぼす影響に触れ，通過儀礼の消滅に言及しているが，重視されていたのはやはり心理—性的な側面であった。ブロスは母親からの未分離や，不相応に高い自己愛，衝動から階層化されていない未熟な自我構造を指摘している。

フォン・フランツは，「顕著な母親コンプレックスを抱いていて，そこから生ずる独特の行動様式を示す若者」[12] を「永遠の少年 (puer aeternus)」と呼んだ。「永遠の少年」をつくり出す原因は，母親に対する過度の依存と，自分のような人間は社会に適応する必要がないとする誤った個人主義にあり，その特徴は，職業についても女性についても安定した関係をつくることができないこと，同性愛，自分はまだ本当の人生を生きていないという不全感であるとフォン・フランツは述べている。そして，フォン・フランツもまた，1959 年から 60 年にかけて開かれた講義の中で，何が「永遠の少年」を「自然の問題」から「時代の問題」にしたのかは重要な問題であると指摘しつつも，具体的な考察はおこなっていない。

このように，ブロスもフォン・フランツも社会構造的視点を取り入れる重要性には触れたが，具体的な考察はほとんど心理学的側面に限られており，双方ともその主要な原因を母子未分離などの心理学的要因に帰していたのである。

2. 社会心理学的分析

今まで見てきたように，青年期延長についての心理学的分析は，それがなぜ社会現象と言われるまでになったのかを説明し得ていない。その問題に正面から取り組んだのが次に紹介する諸説，すなわち社会構造的要因との関係で自己をとらえ，社会の多元化・流動化の中での自己のありかたを分析の中心にすえた「社会心理学的分析」である。

社会構造的要因を視野に入れた分析の最初の試みは，エリクソン (Ericson, E. H.)[13] のものであった。エリクソンは，次々と社会関係に入り，取り返しのつかない関与を生じさせては引き返そうとする青年達を，「アイデンティティの混乱」(identity confusion)[14] という概念で説明した。アイデンティティとは，内的・個人的な同一性の感覚と社会的・集団的な同一性の認知という 2 つの側面からなっており，アイデンティティの混乱とは，それを確立することができない状態をさす。そして，それは時間感覚の障害，不適切なアイデンティティの選択，勤労感覚の崩壊等をひきおこすのである。

エリクソンがアイデンティティの概念を得たのは，青年期境界例研究の途上である。しかしエリクソンはアイデンティティの危機が，軽重の差はあれ現代の青年期には特別なものではないことを発見し，それを発達論に取り込んだ。エリクソンは青年期をアイデンティティを獲得するための心理社会的モラトリアム (psychosocial

moratorium) の期間として，青年期に行われる様々な役割実験に肯定的な価値を与えたのである。

エリクソンが青年期のアイデンティティ拡散を「正常な発達の危機 (normative crisis)」[15] として定義した意義は大きい。それによって，統合・安定した自己を形成することの困難さは，社会の外部に追放された少数の病者のものとしてではなく，社会成員共通の問題として認識されるようになったのである。

だが注目すべき点はそれだけではない。エリクソンの理論は，社会に2つの現象を引き起こしたのである。まず第1に，以前には潜在的なものであったアイデンティティの危機を顕在化させた。第2は，従来は受動的に，いわば巻き込まれるものであったアイデンティティの混乱状態を積極的に選択する者が出てきたということであった。「行方不明」や「脱落」の思想が出現し，ベトナム反戦運動や公民権運動などに参加した人文主義的青年達は，わざと自分を「どっちつかず」の状態におくことを主張したのである。[16]

しかしエリクソンはそれらの動向には慎重な姿勢を示している。彼は人文主義的青年達に共感を示しながらも，その運動を，「神経症的意味あいをもった一連の社会運動[17]」と呼び，臨床家はそのような現象に対して警戒を怠るべきでないと警告したのであった。だが，エリクソンから影響を受けた2人の社会心理学者は，そのような自己の在り方を積極的に評価する方向に進んだ。

ケニストンは，ラディカルズ[18]や関与しない者達 (uncomitted)[19] の調査を通じて，内的・個人的なアイデンティティを持ちながら社会的アイデンティティを持たない期間がますます多くの青年に共有されようとしていることに気づいた。そして従来「遷延された青年期」などのマイナス・イメージを持つ用語で呼ばれていたその期間に若者期 (youth) という価値中立的な名前を与えたのである。彼はその背景として，恒常的な社会変動や青年期の長期化を可能にする豊かさ，核兵器を初めとした暴力の遍在を指摘している。

また，もう一人，エリクソンの影響を受け，自己の多元性・非固定性にさらに積極的な考察を進めた者にリフトン (Lifton, R. J.) がいる。[20]

リフトンは，最終的な自己定義をなさないままで，次々と同一化の対象をとりかえるが，むしろそれを社会の流動化に対応する手段としている健康な青年に注目し，プロテウス的人間 (protean man) と名付けて積極的に評価した。リフトンは，その原因を文化的伝統とのアンビヴァレントな関係や，マスメディアによってつくり出されるイメージの氾濫などの社会構造的要因に求め，従ってプロテウス的人間は青年のみの特徴ではなく，現代人の特徴であると論じた。

興味深いのは，リフトンとエリクソンの自己論が，それぞれが認知した社会的価値システムとの間に対応があることである。

まずエリクソンは，技術変化によって世代間のギャップがまし，社会的価値システムが多元化しているということを指摘してはいるが，最終的には技術的拡張主義と呼ばれる価値システム（エリクソンの言葉では文化的統一体）がアイデンティティの源泉として存在することを信じている。それに対しリフトンは，社会の流動化や科学に対する両価的感情を適切に捉えていた。

そして自己論については，エリクソンが自己の統合・安定の欠如した状態を，終局的には単一のアイデンティティに統合されるべき一時的状態と捉えていたのに対し，リフトンは多元性・非固定性を現代社会における自己の特性と捉えていたのである。

なお，ユング派においては 86 年のユング心理学のシンポジウムにおいて，スイスのグッゲンビュール＝クレイグ (Guggenbühl-Craig)[21] が，青年期から成人期への移行期におこる抑鬱状態や自己決定からの逃避を指摘している。これは，青年期から成人期への移行期には多くの可能性の中から選択を行わなくてはならないという困難や通過儀礼の消滅に由来する発達上の危機であるとされ，その軽度なものが一般的な青年にも存在するという。彼もまた青年期における自己の統合安定の欠如を一つの成長段階として積極的に評価しており，そこにはエリクソンとの共通性を指摘することもできよう。

むろん，このように多元的で柔軟な自己の適応的側面が見直される一方で，従来通りの受動的・病理的な統合性・安定性の欠如も指摘され続けている。例えば，様々な青年期心理学の成果をもとに “The Peter Pan Syndrome”[22] を著したカイリーがその例である。彼は 83 年に出版されたその著書の中で，ここ 20～30 年の間に急増したという「ピーター・パン人間」を分析した。ピーター・パン人間とは確立された価値システムをもっておらず，友人とも異性とも安定した関係を結ぶことができない男性の青年である。ピーター・パン人間が発生した原因としては，両親の不和といった心理学的要因に加えて，許容的な社会，無制限の豊かさ，性役割の変動が指摘されている。

日本でも高度成長期が終わった 1970 年代ころから「大人になれない青年」の大量発生が精神分析の視点か

ら分析されはじめる。日本における研究はエリクソンやリフトン，ケニストン等の社会心理学的アプローチを継承し，それを修正・発展させるというかたちで行われた。

日本においては，統合・安定した自己とそれに失敗した自己という形の従来の対立図式に変わって，新しい図式が明確になりはじめた。多元的・非固定的な自己のあり方が，受動的・病理的なものと能動的で健康なものとに区別され始めたのである。社会の多元化・流動化に翻弄され，病理現象として生じる受動的なものと，社会の多元化・流動化に積極的に対応した結果生じる能動的で健康なものが区別して論じられるようになった。そして後者は，「大人になれない青年」の問題を超えて，今日の社会に適応した新しい自己モデルの提案へと発展していくのである。

自己の重層性・非固定性が受動的・病理的にあらわれた例としては，笠原が分析したスチューデント・アパシー (student apathy)[23] が上げられるだろう。身体的・経済的理由もなく留年を繰り返す青年たちを，笠原はエリクソンのモラトリアムやそれと似た「回り道」「側副路」という概念を使って分析した。彼らのアイデンティティの危機は，中産階級化，高学歴化，「父」の不在という社会構造的要因に根源を発しており，健康な若者にも共有されているものだという。また，むやみに転職を繰り返す青年を分析したものに清水の『青い鳥症候群』[24] があるが，これも病理的あらわれの一つであろう。しかしそれと同時に，笠原，清水は共に，能動的で健康なかたちであらわれた多元的で柔軟な自己にもふれ，そのような自己のもつ可能性に言及している。

また，能動的な形であらわれた多元性・非固定性に注目したのは栗原[25] である。栗原は，社会および社会規範の流動化に対応して本来病理的な領域に限って使用されていた「アイデンティティの拡散」を，適応の一形態として定義しなおした。そして，その流れが収斂する先に「拡散型」または「翻身型」のモデルを概念化したのである。

また，日本における「青年期延長」の問題にもっとも体系的に取り組んだのは小此木である。小此木は，自己限定を遅らせる「大人になれない青年」の発見から出発したが，後にそれを超え，流動化・多元化した今日の社会における新しい自己モデルを提出するに至った。

小此木は 1971 年，自己限定や自己定義から逃避し続ける青年を指してモラトリアム人間と呼んだが，[26] その 6 年後，モラトリアム人間は社会的性格になったと論じる。[27] 豊かな社会の実現，環境変動の日常化，都市化現象などによる旧秩序の解体と根こぎ，そしてマスコミによるモラトリアム心理の増幅のみならず，管理社会そのものにもモラトリアム化の要因が内在されており，それによって競争・管理社会に所属する者にまで，その性格が共有されたというのである。

そして，小此木はモラトリアム人間を受動的モラトリアム人間と能動的モラトリアム人間に分類し，きめの細かい分析を試みた。さらにその後もモラトリアム人間の対人関係[28]や現実環境との関わり，[29] 新しい自己愛[30]のあり方についての分析を進め，従来の統合的・固定的な自己にかわる新しい自己モデルを提出したのである。それが 1985 年の「ソフトな自我」[31] であり，それは多元的な生活場面における役割を，自我の一面・一部をもって「演じる」自我であった。そしてそのような自己が役割を演じ終えたときに戻ってゆく「根の自分」と健康な自己愛，強度のセルフ・コントロールによって支えられているというものである。

II. 成熟社会論に見られる社会的価値システムの変化

先進国において，社会で適当と定められた期間を超えて青年期を引き延ばす若者が，大量に発生しはじめて以来，青年期延長論において，社会構造的要因の重要性は常に指摘されつづけてきた。また，エリクソンとリフトンに見られるような社会観と自己論の対応を考えれば，言説を産み出した者達が属した時代が，社会をどのようなものとして認識していたかを検討することは有益であると思われる。

青年期を引き延ばす若者達が目立ち始めたのは，社会成員の大部分が自らを中産階級として位置付けるようになり，高学歴化が進んだ産業社会の成熟期である。また，各説が指摘する社会構造的要因も，取り上げる要素や重点のおき方に違いはあるが，そのほとんどが基本的には産業社会の極限的な発展とその先に姿をあらわしつつあった新しい社会への移行という大きな流れの中に位置付けることができる。

それでは産業社会とは，そこに属する成員にどのような適応を要求する社会であったのであろうか。ここでは産業社会論において産業社会の成立要件として上げられているもののうち，自己論に関係の深い動機的・イデオロギー的側面を取り上げ，産業社会に特徴的であるとされる価値システムに分析を加えたい。

産業社会の価値システムについての言及はヴェーバー

(Weber, M.)[32] 言うところの「プロテスタンティズムの倫理観」をもって嚆矢とする。職業労働に励むことは地上での神の栄光を増すことであり，それによって得た富は，享楽に用いることなく再び生産に投じなければならないというプロテスタント的倫理観が，資本主義と合致しており，資本主義の勃興期には大きな力を発揮したことを，ヴェーバーは指摘した。

非西欧社会は無論のことプロテスタンティズムを持たなかったが，日本社会は心学や浄土真宗[33]に見られる勤勉と欲望延期を組み込んだ価値システムが同様な機能を果たしていたと分析されている。

生産活動に生きることの意義を見出し，楽しみのための消費を禁じた産業社会の価値システムは，一言で言えば，「絶え間ない生産の拡大」という価値を中心に高度に統合されたものであったといえよう，後に出現する脱産業社会と比較した場合，それはより明確にあらわれてくる。

産業社会の矛盾が明らかになり始めたのは1960～70年代のことであった。産業社会の価値の中心であった「絶え間ない生産の拡大」は，環境汚染や天然資源の枯渇をはじめとした「成長の限界」[34]に突き当たっていた。また，産業社会が追求してきた生産の拡大は豊かな社会を出現させ，人々を「生活の必要」から解放する。それは，産業社会の中心的な価値である絶え間ない生産の拡大に人々を引きつけておく力を減じた。村上はこれら2つを産業社会の「外なる限界」「内なる限界」[35]と呼んでいる。

このように産業社会の価値システムが求心力を失ってゆく過程が，「産業社会の病理」[36]としての側面を強調されていたのに対して，そのような社会を異なった側面から積極的に捉えようとする動きも活発になる。消費社会の到来の可能性を説いた山崎は，ゆとりを手にした人々は生産以外にも，消費に自己実現を求めるようになり，労働時間の短縮にも助けられて，生産以外の場に多元的に帰属するようになりつつある[37]と述べた。

「成長の限界」の顕在化や欠乏からの解放は，生産の拡大を中心的な価値とし続けることに疑念を抱かしめ，また，生産以外の自己実現の発見や，社交集団への多元的な帰属は，価値システムの多元化を促したと言うことができるだろう。

III. 認識システムの変化

病理として排除されてきた特性の「正常」領域への移行は，認識システムの変化とも連動している。自己の多元性・非固定性が新しい自己のあり方として承認されるためには，従来の自己論が背景とする近代的認識システムが弱体化し，新たな認識システムが出現することが大きな力になった。また，多元性・非固定性を備えた新しい自己モデルの出現は，新たな認識システムの具体的実践の一つとして位置付けることができる。

近代的認識システムは，ベーコンの帰納法，デカルトの演繹法をニュートンが統合したことによって，その基礎が形成された。要素還元主義とその背景をなす機械論モデルが，その基本的な特徴である。

また，近代的認識システムはキリスト教にその起源をもつ。神の手によって創造された世界には，隠れた秩序が存在するはずであるという前提から，その秩序を見つけだす営みとして始まったのが，科学の起源であったことが村上によって指摘されている。[33] 従って，その世界観は一元的で，唯一・不変の真理の存在を前提としている。

近代的認識システムは，特に自然科学の分野でめざましい成果をあげ，自然科学以外の認識活動にも大きな影響を与えた。精神分析の流れを汲む青年期心理学も例外ではない。

I で示したように，統合性・安定性の欠如は「病理」的特徴と結び付けられた。そこには唯一・不変の「真の自己」をもつことが「正しい」状態として定義されているのが見て取れる。そして，自己が唯一・不変であるという前提が存在する限り，「正常な」自己の多元的な側面は認識されない。そしてまた，機械論や要素還元論の背後にある実体主義も，異なった環境にあらわれる自己の多元性や，環境との相互作用によって変化してゆく自己の非固定性を認識することを阻害しているのである。

だが，物理学のように早い分野では今世紀初頭から，近代的認識システムの限界は明らかになりはじめた。物理学を初めとする諸科学や芸術，宗教など現実を抽象するあらゆる方法にあらわれた変化を調査したミッチェルによれば，[39] 現在，経済学をのぞくすべての分野で近代的認識システムとは異なった，新しい認識システムが出現しつつあるという。

新しい認識システムは，近代的認識システムが極限まで発達したことによって生じた。様々な分野で近代的認識システムの限界が明らかになったために，各分野で個別的に模索されてきた新たな認識方法から立ち上がってきたのが新しい認識システムである。

近代的認識システムが要素還元論的で一元主義的であるのに対し，新しい認識システムは，関係性を重視し，

世界を多元的に解釈する。この新しい認識システムをここでは「脱近代的認識システム」と呼ぶことにする。

青年期延長論の変遷に見られる自己モデルの変化は，近代的認識システムによって自己を捉えようとする試みが限界に達し，脱近代的認識システムが模索されている過程であり，多元的で柔軟な自己モデルは，脱近代的認識システムの一つの実践であると考えることができる。

また一方で，諸科学や芸術，宗教といったあらゆる分野で起こっていた認識システムの転換は，多元的で柔軟な自己モデルの成立を助けたと言って良かろう。

「現実存在」を多元的な視点から捉え，それによって多様な局面が切り取られることを前提として含んでいる脱近代的認識システムのもとでは，自己の多元性・非固定性は，自動的に「正しくないこと」「あるべきでない状態」と判断されることはない。

また関係論的視点をもつ脱近代的認識システムにおいては，自己は自己を取り巻く環境との相互作用の中に発見される。よって，複数の環境と関係し，また環境との相互作用によって変化してゆく自己の在り方が，認識されやすくなるのである。

IV. おわりに

今日，現代的自己は，様々な分野でその存在が確認されている。例えばエリクソン理論の流れを汲む自我同一性地位 (ego-identity status) の研究においては，オーロフスキー (Orlofsky)[10] が，特定の価値システムにコミットメントを持たないということ自体にコミットメントを行っているような「疎外された達成」を報告しているし，無藤[11]は非固定性・開放性を備えた「プロテウス的拡散」と呼ばれる自己のありかたに言及している。

また精神分析学的自己論の他にも，多くの異なった立場からなされた研究に自己モデルの変遷を認めることができる。

例えばパーソナリティ論では，60 年代末からミッチェル (Mischel, W)[12] が特性論研究を批判し，特性の存在や行動の一貫性をめぐる論争が生じた。

また女性学は，男性が生殖用の女性と快楽用の女性を分割し，異なった価値体系を使い分けてきたことを指摘したが，上野[13]はさらに進んで，男性ばかりでなく女性も多様な生活場面で異なった異性との多元的な関係を発達させていることを指摘している。

消費者行動の分析においても，井関[14]が，生活場面の多元化にともない，一人の人間が多様な行動原理を持つようになったと主張し，それを「一人十色」時代と呼んでいる。

このように多元的で柔軟な自己が「病理」のレッテルを忘れさせてゆく一方で従来のモデルであった統合され安定した自己が不適応を起こすケースがしばしば報告されるようになってきた。空の巣症状群 (empty nest syndrome)[15] や上昇停止症状群 (metapause syndrome)[16] がその例である。

病理の定義/自己モデルは社会的価値システム，認識システムと同形性をもち，連動して変化していると言えよう。

注

1) Foucault, M., 1966, "Maladie Mentale et Psychologie", Presses Universitaires de France, 神谷美恵子訳, 1970 年,『精神疾患と心理学』, みすず書房, 1972, "Histoire de la Folie à L'âge Clas sique", Gallimard, 田村　俶訳, 1975 年,『狂気の歴史』, 新潮社.
2) Rubin, T. I., 1990, 'The Transitional Personality: Dislocation as a Major Character Dynamic', "The American Journal of Psychoanalysis", vol. 50, No. 1.
3) 小北木啓吾, 1984 年,『シゾイド人間』, 講談社.
4) Spranger, E., 1924, "Psychologiedes Jugendalters", Quelle and Meyer, 土井竹治訳, 1973 年,『青年の心理』, 五月書房.
5) Bernfeld, S., 1923, 'Über eine typische Form der männlichen Pubertät' "Imago" 9, 169. In: Spiegel, L. A., 1951, 'A Review of contributions to a psychoanalytic theory of adolescence: Individual aspects,' Psychoanal. Study child 6, 375.
6) Fromm, E., 1941, "Escape from Freedom", New York, 日高六郎訳, 1951 年,『自由からの逃走』, 東京創元社.
7) 土居健朗, 1971 年,『甘えの構造』, 弘文堂, p. 188. Federn, P., 1919, 'Zur Psychologie der Revolution: Die Vaterlose Gesellschaft', "Der Oesterreichische Volkswirt", XI, 571-574, 595-598.
8) Sullivan, H. S., 1953, "Conceptions of Modern Psychiatry", W. W. Norton, 中井久夫, 山口隆訳, 1976 年,『現代精神医学の概念』.
9) Von Franz, M. L., 1970, "The Problem of the Pure Aeternus", 松代洋一, 椎名恵子訳, 1982 年,『永遠の少年』, 紀伊國屋書店.
10) 福田義也, 1988 年,「現代青年論の課題と方法」,『社会科学研究』, 40-3: 100-127.
11) Blos, P., 1954, 'Prolonged Adolescence The formulation of a syndrome and its therapeutic implications', "American Journal of Orthophychiatry", 24: 733, 1962, "On Aclescence", The Free Press of Glencoe 野沢栄司訳, 1971

年,『青年期の精神医学』, 誠信書房.
12) Von Franz, 前掲, p. 7.
13) Erikson, E. H., 1959, "Identity and Life Cycle", International Universities Press, 小此木敬吾訳, 1973年,『自我同一性』, 誠信書房, 1968, "Identity: Youth and Crisis", W. W. Norton 岩瀬庸理訳, 1973年,『アイデンティティ』, 金沢文庫.
14) 青年の危機をあなわすこのエリクソンの概念は一般的にはアイデンティティ拡散 (identity diffusion) として知られているが, 後になってエリクソンがアイデンティティ混乱 (identity confusion) と呼び変えている. Erikson, E. H., 1968, 前掲書参照.
15) Erikson, 1959, 前掲書参照, p. 153.
16) Erikson, 1968, 前掲書.
17) 同上, p. 24.
18) Keniston, K., 1968, "Young Radicals", Harcourt Brace and World, Inc., 庄司興吉, 庄司洋子訳, 1973年,『ヤング・ラディカルズ』, みすず書房, 1960, 62, 68, 69, 70, 71 "Youth and Dissent" Harcort, Brace Jovannovich Inc., 高田昭彦他訳, 1977年,『青年の異議申し立て』, 東京創元社.
19) Keniston, K., 1965, "The Uncomitted: Alienated Youth in American Society", Harcort, Brace and world.
20) Lifton, R. J., 1967, 68, 69, "Boundaries: Psychological Man in Revolution" 外林大作訳「プロテウス的人間」『現代のエスプリ』78:155-168.
21) Guggenbühl-Craig, A., 1986,「ユング心理学における発達心理学の可能性」,『ユング心理学――男性と女性』, 河合隼雄, 樋口和彦, 小川捷之編, 1986年, 新曜社.
22) Kiley, D., 1983, "The Peter Pan Syndrome", Howard Morhaim Literary Agency, 小此木敬吾訳, 1984年,『ピーター・パン・シンドローム』, 祥伝社.
23) 笠原 嘉, 1977年,『青年期』, 中央公論社, 1988年,『退却神経症』, 講談社.
24) 清水将之, 1983年,『青い鳥症候群』, 弘文堂.
25) 栗原 彬, 1981年,『やさしさのゆくえ=現代青年論』, 筑摩書房, 1989年,『やさしさの存在証明』, 新曜社.
26) 小此木啓吾, 1972年,『自我と社会の出会い』, 日本教文社.
27) 小此木啓吾, 1981年,『モラトリアム人間の時代』, 中央公論社.
28) 小此木啓吾, 1984年, 前掲.
29) 小此木啓吾, 1982年,『モラトリアム人間を考える』, 中央公論社.
30) 小此木啓吾, 1984年,『モラトリアム社会のナルシスたち』, 朝日出版社.
31) 小此木啓吾, 1985年,『視界ゼロの生き方』, 三笠書房.
32) Weber, M., 190-05, 大塚久雄訳, 1989年,『プロテスタンティズムと資本主義の精神』, 岩波書店.
33) Bellah, R. N., 1957, 堀 一郎, 池田 昭訳,『徳川時代の宗教』, 未来社.
34) Meadous, D. H., 1972, "The Limits of Growth", Univers Books, 大来佐武郎監訳, 1972年,『成長の限界』, ダイヤモンド社.
35) 村上泰亮, 1975年,『産業社会の病理』, 中央公論社.
36) 同上.
37) 山崎正和, 1984年,『柔らかい個人主義の誕生』年, 中央公論社.
38) 村上陽一郎, 1989年,『聖俗革命』.
39) Mitchell, A., Ogilby, J., and Schwartz, P., "The VALS Typology: A New Perspective on America", SRI International, 吉福伸逸監訳, 1987年,『パラダイム・シフト』, TBS ブリタニカ.
40) Orlofsky, J. L., 1973, 'Ego-Identity Status and Intimacy versus Isolation Crisis of Young Adulthood', "Journal of Personality and Social Psychology", 27: 211-219.
41) 無藤清子, 1979年,「『自我同一性地位面接』の検討と大学生の自我同一性」,『教育心理学研究』, 27-3: 178-187.
42) Mischel, W., 1968, "Personality and assesment", Wiley.
43) 上野千鶴子年, 1989年,『スカートの下の劇場』, 河出書房新社.
44) 井関利明, 室井鍛衛福著, 1991年,『生活起点発想とマーケティング革新』, 国元書房.
45) Roberts, C. L., Lewis, R. A. 1981 'The Empty Nest Syndrome' in Howells, J. G. "Modern Perspectives in the Psychiatry of Middle Age" Burner/Masel.
46) 小此木, 1985年.